

## 議 事 録

会議名 第 10 回佐賀県総合教育会議  
開催日時 平成 30 年 1 月 25 日（木曜日）10 時～ 11 時  
開催場所 佐賀県庁新館 4 階 プレゼンテーションルーム  
出席者 山口知事、白水教育長、浦郷委員、牟田委員、小林委員、音成委員、加藤委員  
（知事部局）坂本政策部長、志岐総務部長  
（総合教育会議事務局）今村政策総括監、他  
議題 （ 1 ）生徒減少期における魅力・活力ある学校づくりについて

### 議事録

#### 1 開会

（今村政策総括監）

おはようございます。それでは定刻となりましたので、只今から第 10 回佐賀県総合教育会議を開催させていただきます。

本日は知事、教育長、それから教育委員の皆様方の他に坂本政策部長、志岐総務部長が出席をしています。

それでは最初に、知事の方からご挨拶申し上げます。

（山口知事）

今日は第 10 回という記念すべき総合教育会議となりました。

10 回目ということでみんなのそれぞれの想いを遠慮せず述べて、意義のある会議になってきたなと思います。

今年が明治維新から 150 周年です。新しい国を作る一翼を担った佐賀藩ということもあり、県全体のあり方として、多くの賢人たちを国家の方に送り出して、国を支えていくんだということで、そもそも県外に人を出す構造になっている傾向があります。それが一つの大きな我々の自負だったのかもしれないと思います。

更に、右肩上がりの戦後の復興期においてもその傾向が続いていて、例えば実業系の学校などは、県内の企業がオーバーフローするくらいの定員を有しており、自動的に県外に人を出す形になっていたのかもしれないと思います。

しかし、これからの時代、地方創生という話になっておりますが、佐賀県の中に多くの技術を内包して、そこから世界に挑戦できるという多くの中小企業、中小企業と言いますか、これからは大きいか中小かはあまり大きな影響ではなくなってくるのではないかと考えているのですけれども、中小企業も十分世界に貢献できるようになるだけのノウハウや技術だと

か特徴を持っていれば、最近の佐賀県の様々な企業が、佐賀牛でも日本酒でもそうですが、チャレンジして非常に成功しているところもあります。

それからものづくりフェスタなどでもご覧いただいていますけれども、ものづくりの能力、世界に匹敵するようなものを作り出している企業もたくさんあります。

しかし、我々は教育機関としては、今までは、そういう時代だったのかもしれないですが、しっかり県外の方に就職をさせる、むしろそうできる制度というのがやもするとあったのではないかと私も思っております。

しかし、これからは県内の企業のことをしっかり考えた上で、佐賀県自体の力を蓄えていくということもしっかり考えるべき時代だろうというふうに思います。

また、これまでお互いで頑張ってきた成果もあって、高卒の県内就職率は3.2パーセントアップということで、伸び率は佐賀県が日本一になりました。これも、ひとえにみんなで力を合わせて、県内企業も一緒になって、ものづくり基金なども使いながらやってきた成果だと思います。

これからはなお一層、県内企業の素晴らしさを知って、スポーツの世界も同じで、能力が高い生徒が高校から、場合によっては中学から県外に出ていくという状況が見られますので、そうしたことについても今日は議論をさせていただきたいと思います。

もちろん、生徒の希望というのもあり、また、保護者にどういうアプローチがあるかという話もありますけれども、そういうところも含めて、議論をさせていただきたいなと思います。

今日もよろしく願いいたします。

(今村政策総括監)

それでは、本日の議事に入りたいと思います。

本日のテーマは「生徒減少期における魅力・活力ある学校づくり」ということで、最初に教育委員会から、県内高校の現状課題、それと、魅力・活力づくりについて資料のご説明をお願いします。その後、皆様方から県内の学校がどうすれば魅力・活力ある学校になるのか、そしてそのことが生徒の県外への流出防止に繋がっていくのか、という観点からいろいろとご意見をいただければと思っておりますので、よろしく願いいたします。

それでは、白水教育長から資料の説明をよろしく願いいたします。

(白水教育長)

それでは、高校の現状課題と対策案を説明します。

まず、県内中学校卒業見込者数の推移を表しています。平成2年に14,458名いましたが、ずっと右肩下がりになりまして、2017年(昨年)3月卒業生は、8,793名。もっと先へいきますと、2031年には、現時点で7千人を割って、6,937名というような卒業生数を見込んでおります。

そのように減少していく中で毎年学級数を見直しております。平成 29 年度は 36 校の県立高校がありますが、そのうち 14 高校が 3 学級以下ということで、高校全体の規模が縮小している現状がございます。

小規模校になりますと、特に活力の課題や学習指導の課題、部活動等の課題等がございます。

その中でも特に、学級数と部活動数のデータがございますが、学級数が減ってきますと、やはり部活動全体の数も減ってきているという現状の中で活動しております。

学校の規模の縮小ですが、2021 年につきましては見込み者数が 7,837 名で、それを県立の高校の学級数の、141 学級数で割り、平均で 4.4 学級数となります。

また、10 年後の 2031 年には、125 学級を見込んでおりまして、平均 4 学級を割るというような状況であり、そういった中で魅力と活力ある学校づくりが必要ということになってきます。

昨年の 3 月に県外高校へ流出・県内高校へ流入したデータでございます。県外への流出者数は、県外の公立へ行ったのが 48 名、県外私立が 355 名、計 403 名が流出をしております。内訳としましては、私立・公立ともに 2 割程度はやはり、野球、サッカーなどのスポーツで流出しています。それ以外は、進学、地理的要因、転居などがございますが、東部地区（鳥栖地区）の流出数がやはり、地理的に福岡に近いですので、非常に数が多くなっている傾向がございます。

県内への流入数ですが、県内公立へは 120 名、県内私立は 289 名が流入しています。県内の公立・私立への流入の 2 割程度はスポーツによる流入であり、公立におきましては、ラグビー、サッカー、陸上で流入しており、私立は野球、サッカーなどで流入をしております。

それ以外の流入につきましては、特に公立の場合は、8 割中 5 割は、地理的な要因で長崎、福岡などから県内公立高校に来ております。逆に私立の場合は、だいたい、進学であり、進学が 6 割程度を占めています。

そういったことで、今、県外の公立・私立高校へだいたい 400 名程度が流出をしておりますので、公立、私立とともに学校の魅力アップがこのことから必要というように考えております。

魅力と活力づくりについてということで、各学校、専門高校・普通高校、それぞれの高校におきまして、進路保障というところで、進学なり、就職指導なりを充実させるために、いろんな特色を持った教育課程をしながら教育活動しております。

その中で、佐賀県といたしましては今、事業を展開しております、さがを誇りに思う教育、ICT 教育の推進、また、太良高校、巖木高校へ導入予定の、不登校・発達障害等多様な生徒への対応等があります。

また、その他にも部活動による魅力づくりが挙げられます。佐賀工業のラグビー、伊万里商業のホッケー、多久高校のスポーツライミング、佐賀北高校の書道、佐賀東高校の演劇など、部活動による魅力づくりをしているところでございます。

この他にも、特に地域企業と連携した商品開発というのを農業高校、商業高校を中心に積極的に行っている状況でございます。

もう一つは、太良では地域と学校が一体となって、地域教育連絡協議会を設置しました。これは、委員長を町長としまして、いろんな関係者が集まりまして、地域と学校がどのような連携をして事業ができるかということで、特にそういう中で体験学習を子どもたちにさせたり、いろんな地域で行われるボランティア活動、農産物販売などに参画をしているという状況です。

さらに、他の高校との連携です。これは特に小規模校になりますので、今、神埼と神埼清明では両校で部活動や学校行事などで何かできないかということで、運営協議会を開催して、合同での行事等を実施しながら活力向上に繋がりたいということで、協議会を設置して検討をしている状況でございます。

いろいろな高校の魅力づくりをしていかなければなりません、一つの案としまして、これから先はやはり、学校と地域の連携・協働というのが佐賀県の高校では必要ではないかと思えます。特に組織につきましては、保護者と地域、同窓会、小中学校の先生などで組織を作り、小中高が連携をして、できる限り体験学習なり、部活動なり、いろんなところで連携しながらやる活動があるんじゃないかと。そうすることによって、地域にある学校へ小中学生に関心を持っていただく。また、逆に地域と高校が連携することによって、高校生が地域のことに興味・関心を持つというようにお互いにメリットがあるというような主旨を持ってこういった協議会を展開していきたいと考えています。

また、これから先はやはり地域が学校をしっかり支え、学校も地域に貢献をするという形で、今までの教育活動にこういった活動をプラスしながら、子どもたちの人間力、生きる力を身につけさせる魅力ある学校づくりに取り組んでいきたいと考えます。以上です。

(今村政策総括監)

ありがとうございました。

それではここから意見交換に入ります。先ほど白水教育長からのご説明の中で、これからは学校と地域の連携・協働に力を入れていきたいというお話がありましたけれども、これに関わらず、いろんな視点から、魅力・活力ある学校づくりにはどうしたらいいのかということについてご意見をいただければと思いますので、よろしく願いいたします。

(牟田委員)

いつもこの会議や委員会で言うのですが、知事、学級数が2学級、3学級の学校がありますよね。規模の縮小には課題ありと書いてあるように、今後10年・20年経つと、もっと2学級、3学級のところが増えてきます。そういう学校がそもそも、今日の議題のように、魅力があるのかということを私は言いたい。

やはり、人がいるということがそもそも魅力だと思うんですね。3人しかいないところで3年間やるのか、10人のところで3年間やるのかと言われた時に、大抵みんな10人の方にいきます。余程その3人の方に魅力があったらわかりませんが、変わらないレベルだったら、人が多いところに人間は行くと思います。それが一つの魅力だと思うんですね。

それと、申し訳ないけれども、知事のおかげで佐賀の人気が出てくるかもしれないが、絶対人口はどうでしょう。

(山口知事)

私は増えると思っています。最初の資料の県内中学卒業見込者数の推移はけしからんと思います。自分の中で、絶対このグラフを 字にすると誓っています。

(牟田委員)

是非そうしてほしいですが、10年間でちょっとそんなに急にはいかないと思うし、子ども達が増えていくとは思えないですね。そうした場合には私は拠点校をと思います。

佐賀はどこも近いじゃないですか。神埼から佐賀西高に自転車で行く人もいるくらいです。10クラスの拠点校を4つくらい作っていくというのが、それがまずは高校の魅力づくりになるのではないかと思います。

だから、普通科もそうやって、実業系も工業・農業をまとめて、商業もいいですけれども。

(山口知事)

牟田委員は佐賀西高校出身ですか。

(牟田委員)

私は伊万里高校出身です。

(山口知事)

牟田委員の時代は、伊万里高校は何クラスでしたか。

(牟田委員)

私の時は7クラスでした。

(山口知事)

7クラスだと学年全員のことがわかりますか。私は5クラスだったけれど、全員ほぼわかります。同級生全員の名前が言えます。5クラスはいいなと私は思っていて、特に西高は昔8クラス、9クラスとかあったというけれど、それでは全然同級生の顔が見えなくて、大きすぎるのではないかなと私は逆に思います。

(音成委員)

私のところは12クラス。

(山口知事)

私は同窓生が12クラスの学校なんていうのはありえないと思います。

(牟田委員)

私は7クラスでも少ないと感じていました。5クラスで知事がいいのであればいいのかもしれないませんが、今7クラスでもこれからどんどん減っていくわけです。

(山口知事)

私も2クラス、3クラスは少し寂しいなとは思っています。

(牟田委員)

少し少ないですね。

学校の編成は教育委員会がすることでしょうと言われたらそうですが、やっぱり知事のお考えとしても、2クラス、3クラスはちょっと悲しいのではないかと、という気持ちを持っていただきたいなど。私は、そういうのは減らしていった方がいいのではないかと考えています。

何回も言いますが、人数が多いというのはある程度魅力になるのではないかと考えています。

(山口知事)

なるほど、承りました。

(今村政策総括監)

今の牟田委員のご意見に関連して、また、別の観点からでも、何かありますでしょうか。

(山口知事)

この前、唐津商業に行った時は、ほとんどが県外就職ということでした。

県外就職すると、その後はそのまま県外にいて、戻ってくることもなく、子どももそこで生まれることになります。なので、基本的にできるだけ佐賀県の中に留まって、そこで子どもが生まれるような形にしたいと思っています。佐賀県は福岡に非常に近いところだから、モデル的には神奈川県と一緒にしたいと思います。神奈川県の人口は増えていきますから。

私が生まれた時は、佐賀県の人口は89万人で滋賀県と奈良県の人口と同じでした。今、滋賀県と奈良県の両県の人口は140万人います。一方で、佐賀県の人口は82.3万人です。

そのような差がどうして出たかを分析してみると、佐賀県が他県に人を出し過ぎているからです。どうしてこんなに人を出す県なのだろうかということ、構造的な問題として捉えてもらいたい。もちろん知事部局側にも企業誘致だとか、そういうそもそもの問題点があると思います。

だから、お互いがそれぞれの中でやっていくというのが大前提としてあって、その中でこれをどうしていくのかということだと思います。

(坂本政策部長)

資料6ページの県外高校への流出・県内高校への流入の表を見ると、流出数が403名で、流入数が409名ということで、数字だけでいうと6名増えているということですよ。

おそらく学級数は、この流出・流入の見込数と中学校の卒業生数で考えて決めているのだですよ。そうすると、これが変わらないという前提で決めているはずだから、余裕を持ってないと入学者数がこれ以上増やせないということですよ。

定員に幅を持たせて募集をしないと、絶対予測どおりにしか減っていきませんよ。何を言いたいかというと、これは定員が絡んでいますよ。

流入・流出がプラスマイナス0とした時に、子どもが少なくなっていく前提で定員を決めていたら、高校の定員はどんな努力をしても増えないということです。県外流出者の半分が県内に残りたいと言ったとしても、枠が増えていないということです。だから、絶対定数は増えないということですよ。そこに思い切った裁量幅を入れないと、右肩下がりには変わらないということですよ。

(教育委員会事務局)

県立はそうですね。私立は少し幅があります。

(法務私学課)

私立は県外から転入してくる分を上乗せしていいという取組をしています。

(坂本政策部長)

それは県立にはないのですか。

(教育委員会事務局)

県立にはありません。

(坂本政策部長)

作ったらいけないのですか。県内公立に流入が今120人あるのであれば、そこを300人の見込みにしておいて、180人増える努力をするということではできないのでしょうか。

魅力づくりとっていて、魅力を作って増やそうとしているのに、枠は変えませんというのは、出口戦略がないような気がしてどういう意味がよく分かりません。

(牟田委員)

それは昨日委員会で言いましたが、ダメなんですよ。

(白水教育長)

県内の卒業者数を見込んで、公私比率を決めています。

私立の方は県外からくる人も勘案しながら定員数を決めるということにしています。公立は見込者数で決めています。私立の中でも定員数を増やしていないところもあります。

(山口知事)

私が言いたいのは、これは社会増減ですよ。元々、さっき言ったように親がいなくなるとかというのは自然増減で、これに合わせていくと自動的に小顔にするような仕掛けになっています。当然私立は公立の定数を減らせと言います。私立が厳しいから。7対3なら、7対3とかで。そうすると、公立は減らします。

これは、すべての考え方がさっき坂本政策部長が言ったように、予定して小さくしていくような設定になっています。

だから方向として、そこをもう一回考え直さないといけないですよ。県内就職率を高めて、いろんなことが増えていくと、今度はだんだんと大きくするように、大きくするようというスタイルに変わっていくはずですよ。それをどうやってしようかという右肩上がり佐賀県政に戻るわけですが、今はそこが自動的に減らすようになっている。

だから、当然減るものだということで、自動的に縮小再生産の方向で高校再編も仕組まれているけど、それでいいの、と私は思っています。

(坂本政策部長)

魅力・活力ある学校には、どんなに大きくても小さくてもしないといけないですが、子どもを多くしようという施策ではなく、小さくなっていくフレームの中でどうかしようという方向になっているように感じます。

小さくても魅力があればいいんじゃないかという話になっていて、魅力があって、大きくしようという話にはなっていないということです。

そのことによって、県外への流出を抑え、県内への流入を増やそうというシステム、考え方にはなっていないということです。子どもの数によって、減少するのはやむを得ない、その中で魅力を増やす、というようになっています。

根本的にそこをどうするかというのが、知事が言われたように理想な気がします。

(今村政策総括監)

今の話から行くと、最終的に、魅力・活力ある学校になっていれば、自分が出た高校の地域に戻りたいという効果もあり、そうすると、その地域の人口が結果的に少しかもしれませんが、増えていくという間接的な効果もあります。最終的にはそうならないと定数的には増えないだろうと思います。

もう一つが、県内の県立も私立も受けなくて、最初から県外だけを受ける方がいらっしゃるのではないかと思います。そういった方たちにまず、県内の高校を受けていただく。そういうことも結果的に、県立はダメかもしれないが、県内の私立は増える可能性があるかもしれないから、まずは、県内の県立を受けてみよう、県立がダメだったら県内の私立に行こう、というような効果も有り得るのではないかとこのように思ったりもします。

(音成委員)

やっぱり子どもが行きたい学校、親が行かせたい学校というのがあり、外に行くというのは学校にそれだけの魅力があり、いろんな要因があります。

だから、やっぱり県外に子どもが行きたがるし、親が行かせたがる。これを県内に結びつけるにはどうしたらいいか、ということですよ。

(今村政策総括監)

大きな視点では、牟田委員さんのおっしゃられたようなことだと思うのですが、ちょっと手前のところでの議論として、音成委員さんが言われたようなことがありますね。

(音成委員)

いかに特色、魅力ある学校づくりをするかということだと思います。

(今村政策総括監)

いろんな視点でそれはあると思います。いい先生をいっぱい集めるとか、あるいは生活環境面からの支援。例えば、寮を用意するとか、いろんな視点からです。

(音成委員)

寮の話も出たんですよ。県外の方が、親が佐賀県の学校に入れたいとなった時になかなか親まで一緒にということはできません。子どもだけとなった時に、県立高校に寮があるかといったら、ないですよ。

(山口知事)

学校をきれいにするとかではなく、そういった方向の施設整備でしたら相談に乗ります。

(音成委員)

絶対に必要だと思います。前なんかは致遠館とかにありましたからね。

(山口知事)

島根の島前高校は、学校がつぶれるというような話になり、1クラスしかないところを、頑張っ寮を作って県外から人を集めて、2クラスにして、今や、2クラスしかなくても、アドベンチャーワールドみたいな授業をしていて、盛り上がっています。

私も、三養基高校はみやき町の学校でいいから、町でそういうふうに仕掛けて、2クラスでも3クラスでもいいから、少しでも特徴のあるような町独自のことをやってください、とこの前も言ってきました。

(音成委員)

そうですね。そういうのがないと、県内にはなかなか。

(山口知事)

寮でもいいし、スポーツ系の先生とかいう話も最近多いけど、そういう話が煮詰まってくるなら是非いろいろ提案してもらっていいと思います。

(音成委員)

そうですね。いろんな問題がありますから。

(今村政策総括監)

他県の場合はやっぱり私立が充実しています。

(牟田委員)

私も寮の話をしましたが、寮を作っても、そもそも受験の段階で長崎県・福岡県にいたら、佐賀県の高校は受けられないのではなかったでしょうか。

(白水教育長)

そうです。しかし、例えば福岡県とかに学科がなければ、実は鳥栖工業や有田工業などには来ています。

(山口知事)

鳥栖工業に駅伝とかでも来ていますよね。それはどういうことですか。

(白水教育長)

運動部推薦で来ています。

(山口知事)

運動部推薦枠を広げればいいのではないですか。

(白水教育長)

ある程度は上げたので、これ以上はニーズがどれくらいあるかが問題です。

(山口知事)

基本的に教育委員会は、大きな呪縛に囚われているのではないかと思います。最初からこういうふうにして再編計画を組んで、小さくなっていくようにしている。そこをもう一回教育委員会の中で議論して考えていただきたい、ということを上申したい。

今までやってきたやり方は、全般的に小顔政策になっているのではないかと思います。諦めていませんか。

企業でいうと、拡大再生産みたいなのはリスクですよ。それに応じて計画するというのは。それすらわかった上で、私は、佐賀県はしっかりやっければ伸びていく可能性はあると思います。

むしろ、そもそも下がっていく前提ですべて制度設計をやっていると、間違いなくそれ以上に下がります。

(白水教育長)

私は、知事も言われたように、地域の学校というのが非常に大事だと思います。私立には私立の特色があると思います。一方で公立は、佐賀県が小規模になったらどうするかというところとやっぱり人をしっかり育てるということだと思います。

その中で地域の良さなり、佐賀県の良さなりをしっかり伝え、そういう中で子ども達が地域に育つとか、そういう人材を今まで以上にやっていくということ。

それと、佐賀県の学校教育では、部活もある程度、勉強もそれぞれの子どもたちの適性にに応じて1人1人を大切にしていって、育てるということ、当然今からそうやっていかないといけないと思います。今からの世の中に出る子どもたちが生きていく必要がある。

もうひとつ、佐賀県もそれぞれいろんなことをやっているのですが、やっぱりPRが足りないというのも、弱点の一つであると思います。

(山口知事)

公立高校は、私立高校に比べると割と均質的なところがあると思いますが、公立高校も、もっと個性を持たせればいいのではないのでしょうか。致遠館はしこたま勉強させる、です

とか、佐賀北高校は部活とかもバランスよくやる、とかいうように。

他県はあんまりしていないですが、佐賀県は公立高校に個性を持たせて、そういった個性のある方を校長に任命したりしてやったらいいと思います。

(白水教育長)

各学校の目標がそれぞれあります。専門高校は専門高校で、進学校なら進学校で。それを充実させるということが一番基本にないといけないし、そのプラスアルファの部分でどうするかということをやっていくべきだと思います。

(山口知事)

あとは、実業系です。やっぱり農業高校はやっていることがすごくカッコいい。だから、農業高校は農業高校としての特徴をしっかりと残していく。妙に普通高校っぽくしても意味がないと思います。それに、普通高校より実業系の学校がこれから間違いなく伸びてきます。

(白水教育長)

それは間違いなくそうです。そこでどうしていくかということです。しかしまず、基本的に公立学校の使命は子ども達1人1人をしっかりと育てていくことだと思っています。

(山口知事)

その時に佐賀の良さをという流れを加味すれば、県外に出る人はしょうがないですが、いずれ佐賀のためにという想いを強く持った子を育てれば、これからの世界人としても、ローカルの気持ちをしっかりと持った人じゃないとグローバルになれないから。

だから、その方向を一致させれば、県の施策と教育委員会のやっていることがうまくマッチングしだして、いい感じで車輪が回りだすと思います。

(白水教育長)

一律にはやっぱりできないと思います。それぞれの子どもの適性もありますし、学校の状況もあります。

(山口知事)

牟田委員さんは佐賀に帰ってきたんですから。やっぱりいいなって、カッコいいなって思ってます。

(牟田委員)

例えば県立高校のスポーツ推薦の枠は、各高校で勝手に拡げているのですか。

(白水教育長)

一応指定校は基準があります。

(牟田委員)

指定校になったら、例えば定員 150 人だけど、そのうち 100 人はスポーツ推薦にする、ということは学校で決めていいのですか。それとも教育委員会が決めるのですか。

(保健体育課)

一応、指定校の枠はインターハイの要綱のエントリー枠の半分ということで上限を設定しています。

(牟田委員)

例えばその高校は 30 人しか取れないということは決められているということですか。委員会が決めているのですか。学校が決めているのでしょうか。

(保健体育課)

教育委員会で決めています。

(牟田委員)

佐賀も市内は佐賀北高校が人気なんですよ。生徒も楽しいみたいです。佐賀北高校はスポーツも全国レベルで行けますから。

だから、おっしゃる通りで、魅力ある学校にするためには、推薦の枠とかで特徴を出すというのは大事だと思います。

(山口知事)

それは、教育委員会でできる話なので、今の話、私は賛成だと言っているだけで、予算措置でも、その方向であれば協力するので、ということです。

(音成委員)

先ほど寮の費用なんかも予算等も考えますよ、と知事はおっしゃいましたが。

(山口知事)

要求をしていただければ。ベクトルはそっちの方向で、小顔政策をやめようねということころでいっているのです、そういった方向であれば。

(坂本政策部長)

スポーツ枠というのは、県内枠、県外枠というのはあるのですか。

(保健体育課)

はい、県外からも来ております。

(坂本政策部長)

県外は、枠としてはあるのですか。

(保健体育課)

枠はないです。定数です。

(坂本政策部長)

公私比率の間でいろいろあると思うのですが、県外枠だけを上げると、公私比率にはあんまり影響しないですね。

(白水教育長)

県内の高校に入れなくなりますよね、定員の中にスポーツ枠を入れているわけですから。

(坂本政策部長)

定員を少し柔軟にして、ということです。先ほど言いましたように、減少していく中学校の卒業生の数でしか設計されてないから、どんなに頑張ってもそれにしかなっていないですね。小顔政策ではないですが、そうにしかなっていないということですよね。

だから、これを増やそうと思うと、これ以外の要因を入れて、高校の定員枠を決めないと絶対増えないシステムですね。

(山口知事)

そうですね。公私の問題だって、逆に他の県とかでも、県立の方がどちらかというと上位概念だったりしますので、親の立場からすると、県立の定員数が決まっていて、そこに県外から人が入ってくると、その分県内の人の枠が減るということですね。

県外の枠を県内の枠と別にするのはどうでしょうか。

(坂本政策部長)

県外の枠だけを作って、例えば通常は定員数が100人だったのを、県外が入ってくれば120人までは伸ばせるとしてはどうでしょうか。県内の子どもたちには影響をさせないようにする。この問題でたぶん公私比率は揉めているでしょうから。

(山口知事)

そうですね。そこは仕掛け次第ですね。

(坂本政策部長)

県外の子供たちがくることによって、私立に行く子の数が減ることはないということにして、別のルートで来た人は、公私比率に関係ないというようにしておく。そうやって、少し定員数に余裕を持たせると、少しは生徒数が増えると思います。これがないとたぶんまったく増えないですね。

システムとして増やしてはいけないシステムですので、増えるはずがないですね。

(山口知事)

あとはこの話、報道機関にあんまり報道してほしくない。結局よその県との問題になる。

(坂本政策部長)

できるかどうかはわかりませんが、そういうふうにしないと教育委員会の見込みのとおりには、学級数は変わっていかないですね。

(山口知事)

まずは仕掛けです。小顔システムを変える仕掛けとして考えていただきたいと思います。

(加藤委員)

佐賀北高校って人気があるじゃないですか。

山口知事がもっとユニークな学校ってあってもいいんじゃないかなってようなことをおっしゃった時に、山口知事、この前ストリートファイター佐賀ということでストリートファイターの格好で出ていらっやいましたよね。

この資料にも、魅力・特色ある学校づくりで、さがを誇りに思う教育やICT教育など、4つ挙げてありますけれども、佐賀県は、ICT教育に特化しているようなところを土台にしたことというか、ITに特化した方向ですね。

また、ガイアの夜明けに出演された「株式会社悪の秘密結社」という、やばい仮面率いる、ヒーローショーに特化した総合イベント会社が福岡にあります。

そこがすごく今人気があって、どんな人やキャラクターでも、ヒーローとして輝かせられるような悪役を目指しているんです。

そこで私は、そんなユニークな高校があったらいいなと思うんですね。

(山口知事)

いいと思います。私立の専修学校を今応援しているのは、公立もだけれども、私立にもっともっと尖ってほしいからです。

(加藤委員)

ITに特化して、そこにきたらプログラミングとかできて、ちょっとしたアプリも開発できるような勉強ができる、そういった高校があれば、地域に貢献できるし、今企業誘致もされているので、そこに就職とか、直結できるというような、そんなユニークな学校。

だから、校長先生も校長先生ではなくて、悪役なんか、みたいな、そんな学校があれば、とっても楽しそうに専門的な分野を思いっきり勉強できる、みたいな感じで。私の妄想ですけど。

(山口知事)

建学の精神っていういろいろだから、それぞれ個性を出したらいいと思います。

(加藤委員)

そして、ITに特化した学校があって、IT企業とコラボして何かものを作ったりとか、そういったことができる、そんな学校があったらいいと思います。

(山口知事)

そうですね。今、特にゲーム系の企業は佐賀県が大好きみたいですし、Cygamesとかが来ていますから。

(加藤委員)

それで、ICTを柱にした佐賀県、のような感じで、一本の柱ができるとうちも思ったりします。

(牟田委員)

まとめたいになりますが、公私比率が下がると大変でしょうし、他県から引っ張ってくるということもあるとは思いますが。

しかし、流出の400人が止まれば、3年間で1200人です。先ほどもおっしゃったように、スポーツで出て行く人も多いので、スポーツを県内の県立高校・私立高校で頑張っていたら、スポーツは佐賀県内で頑張るんだ、というようにしてはどうでしょうか。

(山口知事)

そのプログラムは、今度の予算でも作ろうとしているよね

(牟田委員)

進学も、ラサールに行くのをやめて、弘学館にとか、そういったことで400人の流出を止めるということをまず目的にしてはどうでしょうか。

(山口知事)

そうです。今のままではダメです。教育委員会の皆さん、事務職員の方も含めて、そういった気持ちでやっていけばガラッと変わっていくはずです。

(浦郷委員)

今日、お話を聞きながら「なるほどね」と思ったのは、いろんな意味で枠を決めすぎて進めてしまっているのは確かにある、ということをしみじみ感じました。

例えば、学校の再編みたいな問題についても、初めにありきみたいな形の中で考えているような面がある、というのを感じました。その他の面をいろいろ考えてみると、そういったような形で、画一的な公立学校のシステムみたいなこともあるね、と、結構少しショックを受けました。

そういった枠を取り外すという発想でやると、やれる部分がけっこうありそうだなと思いつつながら今日いろいろお話を聞いているのですが、少し発想替えをして、何が魅力なのかということのを改めて考えなければいけないという思いであります。

結局、公立の学校のことを考えると、普通高校はだいたい同じような形ですよ。その学校独自のものを非常に出にくい形になっているかもしれない。だから、もっともっと地域に根差した学校の独自性を作り上げる。

その学校が何を求めているかというのを一つの学校に考えさせながら作っていくことをしないと、現実的な魅力には繋がらないだろうと思います。そう考えていくと、やれることがありそうだなと思いつつながら今日、お話を聞いていました。

(牟田委員)

そういう高校に進めば、先ほど知事がおっしゃられたように、佐賀が好き、佐賀に残ろう、というふうになっていきますよね。

(山口知事)

高校に対する想いが半端なく出てくると思います。

(小林委員)

地域との連携で言いたいことがあるのですが、学校の中だけで子どもを育てようと思うと、やっぱり学校の先生のキャパって限られています。

そこで、やっぱり地域の面白いところとか、ゲストティーチャーでいろんな尖っている人とかを呼んできて、その学校を刺激してもらうようなことができる、地域のことでも知りながら、何か世界につながるようなことをやってみようかと思うようになると思います。

そういう、子どもたちの視野を広げてあげるようなことができるような人を呼ぶ。予算がいるとは思いますが。

(山口知事)

予算、いいですよ。

(小林委員)

そういった人を呼んでくるようなことを、実業高校だけでなく普通科高校とかも。実業高校はけっこう地域のことをやっていますが、普通科高校って、勉強のことだけやっているイメージがあるので、やっぱりもっと地域貢献を考えた時に、いろんな視点のお話を学校の先生以外の大人から聞くっていいなと思うので、そういう予算といいですか、人を連れて来られるようなことができればと思います。

(山口知事)

ものづくりなどは、10億円の基金を積んでやっています。地場の企業も増えてきている。

予算も、今年は明治維新150年なので、教育改革というのは1丁目1番地なんです。佐賀県は、ずっとあの頃から、ものづくりをしていましたから。だから、そういった発想の切り替えをするのにいい年なので、是非みなさんで議論してほしいと思います。

今までの「もんだ症候群」に結構囚われているので、こういうもんだ、とか、県立高校はこうだ、とか、そこを一度取っ払って議論してもらえたらと思います。

(今村政策総括監)

先ほど白水教育長が、魅力そのものは持っているところもあるが、PRが少し足りないのではないかと言われていましたが、魅力を伝えきれてないということもあたりするのでしょうか。

(音成委員)

各高校で魅力プロジェクトみたいなものを作って、高校生自身が自分の学校のことを中学生に生の声で、いろんな学校の説明書とか、高校のそういうものを見たりするけど、高校生が中学生たちに自分たちの声で、自分の学校はこんなに魅力あるんだよ、と発信していくこともいいと思います。

(山口知事)

私立は、魅力化の予算を増額していますよね。県立高校はやっているのですか。北高はこんなことやっているとか。やっていないですよね。

(白水教育長)

そういうことは県立ではやってないです。

(山口知事)

してないですよね。私立はやっているわけです。

こんなことやったら魅力化になるということで、例えば読書の何かをやるとか言ったら、その分何百万というふうに予算措置で積んでいるわけです。だから、個性が出ています。

(小林委員)

中学校に行ったらいっぱいポスターが貼ってありますが、やっぱり私立が面白いんですよ。ぱっと見たくるような。公立はけっこう文字が多かったりして、ちょっと魅力が。

(山口知事)

教育委員会のこの5名でやれることは、山ほどあると思います。教育委員はすごく上部組織で、その事務をやっているのが教育委員会事務局ですから。だからここで決めることは、強く、大きいんです。だから逆に言えば、私たちこういうことやりたいのに県が予算つけないなどということがあれば、この会議で議論してもいいと思います。問題点があれば。

(坂本政策部長)

県立にはオープンスクールはあるのでしょうか。それは子ども達がやっているのですか。専門学校や専修学校などは、オープンスクールを子どもたちがやりますよね。

(白水教育長)

学校によって、子どもたちがいろいろ説明したり、案内したり、体験を発表したりはします。

やっぱり魅力となると、私も現場にいて、子どもたちが何を魅力に感じているかを掴んでやるということと、子どもが、こういうことがしたいと思ったことを、全部はできないけど、そこで、自分から学ぶ姿勢というのが一番大事。

今の教育のフィールドワークってあるんですけど、それ以外に何かやるといったら、部活動が校外の活動があります。小規模校だとそういうのがなかなか、学校側としての先生のキャパがありますけど、そういうのを地域とうまくしながらやる。大学とも連携しながら、子どもたちが行ったりだとかしていますが、そういうのを広げていくということです。

当然、予算も人も必要ですけど、やっぱり、地域の人材を活用するというのが、地域にとっても良いわけですから、そういうことを作っていく。土台はそういうことをしながら、学校が見える形を作っていくって、知事が言われるようにやることは山ほどありますけど。ベースはベースで、想いはそういう想いで。

(山口知事)

私は応援します。今年は特に明治維新 150 年ですから、切り替えのチャンスじゃないでしょうか。

(牟田委員)

そうやって、魅力ある高校にしようという発想を校長や学校の先生がお持ちかどうか、私はよくわかりません。

(山口知事)

それを変えていかなければいけません。単なる人事異動で校長をやっているようなことはよくないと思います。高校のリーダーだから、と私は申し上げたいです。

(白水教育長)

そういうのはありながらもいろいろな教育の課題があって、バランスよくやっていかないといけないので、特色だとかは、必死にもがいてやってもらってしまして。

(山口知事)

浦郷委員に校長をやっていただいたら、浦郷学校みたいなものができるのではないのでしょうか。そういったものもいいと思います。

(浦郷委員)

例えば校長あたりは、どういう学校にするかということを絶えず考えていらっしゃると思います。

そして、白水教育長からありましたように、今はそれと含めて、こうでないといけないというような枠みたいなものもあったりするので、その中でというような形の発想になりがちではあります。それでも、この学校はこういうふうにしようということを校長先生はきっちり目標を持って取り組んでおられます。

しかし、それも含めて、ひょっとすると、いろんな枠みたいなものを意識しながら、少し縮こまっているのかもしれない。

(山口知事)

例えば、何々学校の校長になるとなったら、その学校の伝統、考え方や校訓というのをしっかり学んでいくのでしょうか。

(浦郷委員)

自分で、ですけどね。例えば、三養基高校にいくとなると、三養基高校がどういう学校でどういうことを求めてきたのかという中で、それで新たに何ができるかというような発想はもちろんします。特に、普通高校なんかは進学が大きな要素になりますので、そこのところをどういう風に今ある価値を変えてやっていけるか、というプランをもちろん持ってですね。

(小林委員)

私は、先生方もですが、生徒たちが自分たちの学校を魅力的にと、生徒の自治ができるような、校則がたくさんあるというのではなくて、本当に自分たちでマークとか制服とかもなくいいし、本当に自分たちで学校を作っていくんだ、っていうような環境を作ってもらえたら、もっと自分たちで発信もしていけるのではないかなと思います。

本当に、おせっかいくらいやってもらっているので、そういったところを大人が手を引いて子どもに任せていくと、生徒自らが発信して、後輩にもうちの学校こんないい学校だぞと言って、先輩が声を掛けるとかそういうことができこないかなと思います。

(牟田委員)

制服ないし、校則ない、とかいう学校もあっていいと思います。だけど、その壁をぶち破るのは。

(山口知事)

教育機関では何がそういったことを邪魔するのでしょうか。「牟田先生、そういうわけにはいきません」とどなたかおっしゃるのですか。

(牟田委員)

現場は大変なんですよ。

(山口知事)

現場は大変なんです。

(今村政策総括監)

ありがとうございました。時間となってまいりました。

今後の教育行政のヒントとなるようなご意見がいっぱいあったと思います。協力をしながら進めてまいりたいと思いますので、よろしく願いいたします。

次回の議題・日程等についてはまた改めてご連絡いたします。

(山口知事)

今回の議題はその2をやしましょう。その後どうなったのかについて。今日はとてもいい話のできた気がします。第10回にふさわしく。

そうは言っても、簡単にはできない、ということもあるでしょうから、その中でできることを考えましょう。

(今村政策総括監)

はい。ありがとうございました。また改めてご連絡いたします。それでは、第10回佐賀県総合教育会議を終了いたします。